ソーシャルワークとフロネーシス（賢慮）

愛知県社会福祉士会 安田 光良（会員番号 007504）

キーワード：フロネーシス、熟慮、困難な判断

1. 研究目的

本研究はソーシャルワーカーとフロネーシス（賢慮）の関係を探求する。空閑は「生の営みにふさわしいソーシャルワークのあり方」の参考として「フロネーシス概念が使えるのではないかと問いかけ「ソーシャルワークという経験の中にあるフロネーシスを引き出す作業が必要」（空閑 2015：102）と指摘した。ところでフロネーシスを用いて実践するという事は、それが倫理的目標を果たすためにあるということに留意しなくてはならない。ソーシャルワークは「他者に対する行為」として存立し、それは何よりも「より善き社会」を構築するための実践であるから、そこには向かうべく目標がなければならない。筆者は前大会で、Ricœur の「小倫理学」を手掛かりにソーシャルワークの倫理的目標を考察し、その達成にはフロネーシスが不可欠であると触れた。そこで本研究は、ソーシャルワークとフロネーシスの関係を明らかにすることを目的とする。

2. 研究の視点および方法

ソーシャルワークとフロネーシスの関係を明らかにするため、①フロネーシスの意味、②その内実である熟慮の働きとは何か、③フロネーシスから実践へはどのように移行されるのか、という3つの問題系に分け、それぞれに応じた議論を参照していく形で進めていく。その結果を受けて考察部ではソーシャルワークとの接合を試みる。

3. 倫理的配慮

本研究は文献研究であり「日本社会福祉学会研究倫理指針」を遵守し行った。

4. 研究結果

①フロネーシス（phronesis）：フロネーシスは人間活動の一つである。「つまり賢慮は、〈よく生きること〉をめざす実践知ないし実践的能力」であり「正しい目的と適切な手段とをともに考慮するような実践的理性」である。葛生（1989：153）は実践知、即ち「他の方法でもありうる」偶有的事象を対象とするものと性格づける。Gadamer（=2008：501）は「行為を導く知」「瞬間瞬間の状況からの要求に応えなければならない状況知と同じ」とみなしている。

②熟慮（deliberation）：Dewey（=1962：3-5）の倫理学は「人間行動を取り扱う」「正または邪として判定する」学問であり「複雑な困難な状況に直面」し「行為の標準に関して多大の疑惑や難局にある」という社会認識の基にある。そこで熟慮は、価値判断に関わ

る「行動の選択」として働く。つまり「何をなすべきかの決定に向けられたとき、それは熟慮と呼ばれ」(Dewey=1962:264)「価値の量ではなく、質を取扱う」(Dewey=1962:265)。そして「現在の活動力に混乱と不安定があるときに生じる」(Dewey=1960:164)。

③フロネーシスから実践的知恵 *sagesse pratique* へ: Ricœur にとり、フロネーシスは熟慮なしでは成しえない。すなわち『賢慮』についてわれわれは次のことを銘記する。その目指す地平は『善い生き方』であり、その媒介は熟慮であり、その当事者は『賢慮の人』(phronimos) であり、その適用点は個別的な状況である。(Ricœur=1996:359) 道徳的判断を為す際に生じる、葛藤する状況に対応する「諸規則のあいだで一刀両断にひとつを選ぶような規則はもはやない」「現場での道徳判断のケース」(Ricœur=2009:215) において発揮されるものである。こうして Ricœur はフロネーシスを実践面に移している。

5. 考察

ソーシャルワークは医療実践や法実践と同様、「困難な判断」を強いられる。それは、道徳的判断が困難な葛藤状況が生じている只中に、ソーシャルワーカーが身を置かざるを得ないからである。複雑な価値関係の中で、その時その状況においての最適な解（正解ではなく）を模索する。まさにフロネーシスが求められている事態である。ここから、フロネーシスとの関連から、個別性と普遍性のあいだ、個の尊重と抽象的規則のあいだで解を結う営みというソーシャルワークの一面が明らかになる。

しかしながら、果たして状況の中にあるジレンマや、人と人の意見の対立構造（価値観の相違）があるから「困難」なのだろうか、という疑問が生じる。何かもっと根源的なものが見え隠れしていないだろうか。May,R が記したように、人生とは「善と悪の混合であることの体験の場」であり「悪を離れて善を成就することではなくて、悪あるにもかかわらず善をなすこと」(May,R=1980:334-5) である。この「善悪の混合の渦中」にソーシャルワーカーは日々投企される。そして、各人のいかなる判断やそれに基づく行為に宿る「善に含まれる悪」を感知してしまう。さらに厄介なのは、ソーシャルワーカーは、「アリストテレスが指摘したように、ただ善人のみが、真に善なるものの良い審判者である」(Dewey=1962:262) と言われるように、ときに「良い審判者」の役目を期待される。ここでもやはりときに、自らの判断および成した行為の中に「悪めいたもの」を感じてしまう。これが「困難な判断」が求められる葛藤状況の内部構造であり、フロネーシスが求められる始点ではないだろうか。しかしこのことは同時に、フロネーシスが求められるその時から、ようやく初めて倫理的目標に近づける、ということも示している。

今後は、ソーシャルワークが倫理的目標に向かう実践的知恵の一形態であることを「ソーシャルワークの思考体系」として示していきたい。

【文献】アリストテレス『ニコマコス倫理学』、Dewey,J『倫理学』『人間性と行為』、Ricoeur,P『他者のような自己自身』『レクチュール』他、当日資料配布にて詳細。